

第2回 京都市地域コミュニティ活性化推進審議会 摘録

- 1 日 時 平成24年1月26日(木) 午後6時00分～午後8時00分
- 2 場 所 職員会館かもがわ 2階 大会議室
- 3 傍聴者数 2名
- 4 概 要

京都市地域コミュニティ活性化推進計画(素案)について、資料4に基づき事務局から説明のうえ、意見交換

● 立木会長(同志社大学社会学部教授)

計画(素案)の1ページはイメージ、2ページは計画の位置付けであり、我々の了解事項だと思う。3ページは右(「基本となる考え方」。以下「資料右」と表記。)が前回議論したところ、左(「みんなで目指す10年後の姿」。以下「資料左」と表記。)がこの計画の上位の市基本計画の項目であり、矢印で結ばれている。これについてご意見を。

○ 米川委員(市民公募委員)

パッと見て複雑でわかりにくいと思う。

○ 高橋委員(京都市地域女性連合会常任委員)

地域コミュニティには新しい姿が必要。お金ではなく、ワクワクするもの、おトク感があるものに人が集まってくると考える。シンポジウムなどで、新しい取組などを紹介できるといいと思う。

● 立木会長

新しいコミュニティの姿を示すときに、「ワクワク感」とか、「おトク感」とかのキーワードをどう盛り込むか。

○ 山本委員(京都市市政協力委員連絡協議会代表者会議代表副幹事)

上京では、90%町内会長が市政協力委員を兼務しており、市政協力委員のあり方を考えていく必要がある。また、役所の市民サービスが良すぎて何でも電話で済んでしまうが、地域のボスのな人に相談に行くようなことがなくなり、つながりがうすれてきていると思う。

○ 船戸委員(市民公募委員)

私の学区ではワクワク感のあるイベントをどんどん実施し、地域の魅力などを知らせることで、マンションなどのコミュニティができてきた事例がたくさんある。

○ 中嶋委員(山科区西野学区自治連合会会長代行)

資料右の切り口はいいと思う。「自主・自立のコミュニティ」のところで、地域コミュニティの活性化の推進は、自治連合会が中心となって進めていくのがいいと思う。どこかが核となる必要がある。

○ 平田委員(京都市社会福祉協議会事務局次長)

市社会福祉協議会の行動計画では、住民主体による居場所づくり、お年寄りのふれあいなどの活動を広めようとしている。地域の受け皿は一つであり、住民から見てもわかりやすく示していかなければいけないと感じている。

● 立木会長

自主防災会、PTAなど、部局ごとの地域組織がある。地域活動という大きなものを推進するときはどう考えていけばいいのか、計画の中で語らなければいけない。

○ 谷口委員(京都市PTA連絡協議会副会長、京都市立幼稚園PTA連絡協議会会長)

資料左には学校やPTAが全部あてはまるのに、資料右は別々になっていてわか

りにくい。

- 村上委員（京都市教育委員会事務局指導部学校指導課参与）
資料左と資料右を結ぶ線は、それぞれ一つにまとめて対応させる方がわかりやすい。「未来の担い手を育てるコミュニティ」は大事なこと。小さいときから地域に関わり、地域のことを見て学ぶことが大事だと思う。学校教育の中でも、そういう視点を意識すると、より良いつながりが生まれるのではないか。
- 坂本委員（下京区光徳自主防災会会長）
資料左も資料右も内容的には理解できる。自治連合会の行事はマンネリ化しており、先行事例を共有していかなければと思う。
- 大田垣委員（下京区有隣自治連合会会長）
資料右は、市の基本計画との関連が線で示されており、問題ないと思う。「地域住民が主役のコミュニティ」とあるが、主役となっていない人をどうするかが問題であり、各論では十分な詰めが必要ではないか。
- 中西委員（特定非営利活動法人京滋マンション管理対策協議会 業務推進プロジェクト コミュニティ部会委員）
京滋マンション管理対策協議会でも、地域との関わりができにくくなっていることを問題視している。
- 長上副会長（龍谷大学社会学部教授）
線が理解を妨げる。また、表題は活性化に関する表現にするとイメージしやすい。
- 立木会長
基本計画に示されている、「活性化している」という10年後のイメージに近づけるためにどうするのか、資料右と対応関係がない。また、毎年、そのイメージにどれだけ近づいているのか、進捗管理するうえでもわかりにくい。活性化したイメージの世界では、自治連合会、社会福祉協議会、自主防災会、PTAなどの組織が、一つに統率されているものなのか、互いに連携しているものなのか。
- 長上副会長
例えば、地域で活動している団体が誰の目にもわかりやすい、どこでどんな活動をしているか互いに知っている、困ったときにはここに行けばいい、といったイメージではないか。
- 立木会長
子どものことはPTA、高齢者の見守りは社会福祉協議会、日常の生活のルールをどう決めるかといったことは自治連合会、みんなが幸福になるためにいろいろな目的を達成する必要があり、目的別に組織があるというご意見である。
- 平田委員
いろいろな地域の現状がある。自治連合会が、社会福祉協議会、少年補導委員会、自主防災会を、組織的な連携をとりながらコントロールしている地域もあり、それぞれが活発に活動しながらゆるやかに連携しているところもある。
- 立木会長
基本計画の下位計画であるならば、基本計画に合わせた方が進捗管理しやすいと思う。資料左と資料右を一対一対応に組み換えられないかと思う。そのためにはどうしたらいいか。
- 村上委員
資料右は、わかりやすい言葉で理念を示し、それぞれの説明を資料左と対応する表現に変えないとわかりにくい。夢のある、目標がわかりやすい言葉が欲しい。

● 立木会長

資料左の「10年後の姿」が実現しているイメージのそれぞれについて、資料右で、こういうところを目指すという整理ができないか。

○ 船戸委員

ミッション、目的を掲げておいて、テーマごとに整理していったらどうか。

○ 高橋委員

中心となるミッションや目的は地域によって違うと思う。それがひとりよがりになってしまう可能性があるので、核となるものが欲しい。

● 立木会長

地域の実情に応じていろいろな連携の仕方があるが、地域の核となる組織やつながりが必要ということであり、資料左の2の実現に向けた方向性のキーワードとして使えるのではないか。こういうキーワードを使って、資料左と資料右を一対一対応に出来ないかと思う。

○ 大田垣委員

表題の「在り方」があいまいな言葉。「目指すべきコミュニティの活性化のための取組」のように絞れば整理しやすくなるのではないかと思う。

○ 山本委員

私の学区では23の団体が活躍しているが、一つにまとめれば力になる。きちっとした命令系統ができないかと思う。

○ 船戸委員

まちづくり委員会が、この10数年間、内閣府から助成を受けながら活動してきたが、まちづくりに参加する地元の青年が育っていないことからこの3月で一旦活動を終了し、経験を活かして新しい組織をつくる。市の広報で、毎月良い事例を掲載すると、いろいろな方に参考にしてもらえらると思う。

○ 高橋委員

大事なことだが、それを見るのは関心がある人であり、無関心な人がいる。震災時、自衛隊に対して、丸投げした地域、文句を言う地域、炊き出しなどの協力をした地域があり、協力した地域は瓦礫の撤去が早く終わった。地域コミュニティが崩壊したらどうなるか、みんなに考えてもらわなければならない。

○ 船戸委員

気付いてもらうのも広報。活動がない地域でも、地域の良さを根気良く知らせていくことが大事だと思う。

○ 中嶋委員

私は、パートごとのチームで仕事をしてきたが、それぞれが問題意識を持ち、議論し、共通認識し、目的を目指して力を結集すると、5人でも6~7人の力が出る時があった。それを地域で振り返ると、各パートはPTAや社会福祉協議会などの各団体。そういう地域をつくりたいと思う。

○ 長上副会長

例えば、資料左の1に対応する中身として「議論・対話があるまちをつくる」、「いろいろな情報が見えるまちにする」、「人が行き交うまちにする」といったイメージはどうか。

● 立木会長

そういうキーワードを交えて議論して欲しい。

○ 米川委員

子どもが道路に落書きをしてもいいまちづくり。道路を通行止めにし、イベント等を行う日をつくって子どもが遊べるようにすると思う（資料左1のイメージ）。

○ 船戸委員

地域の公園や広場を利用してコミュニティをつくる（資料左1）。地域と学校と保護者の三位一体となったコミュニティが必要（資料左3または4）。地域の中の達人を探して子供たちに指導してもらうなど活躍の場をつくる（資料左5）。

○ 中西委員

P T Aが主催し、自治連合会、見守り隊、婦人の会などいろいろな団体が参加してもちつき大会や昔遊びを教えるイベントを開催した。

○ 中嶋委員

だれでも何でも話せる地域づくりはどうか（資料左2）。

○ 平田委員

障害のある人が住みよいまちをつくるにはどうしたらいいか考える時に、障害のある人に集まってもらって話し合いながら課題を勉強する。気軽に何でも話し合える地域づくりは目指すべき大きな方向の一つではないかと思う。

○ 山本委員

P T A、少年補導委員会、自主防災会といった団体が、それぞれで動くのではなく、一つになって、同じ目的をもって連携して活動できると何か新しいものが生まれてくるのではないか。

○ 谷口委員

みんな地域から離れた私立の幼稚園に通わせており、公立幼稚園が衰退している。地域に根差した幼稚園に入れて地域に馴染んで親と一緒に成長していける地域づくり。子どもが小さな頃から地域に馴染んでいくかたちをつくるのが大事。小さい頃から親子で知る。

○ 高橋委員

地域の中で子どもは宝。宝を地域で共に育てる「共育」が大事ではないかと思う（資料左3）。

○ 大田垣委員

地域活動に無関心な人をどうするか。ここに示される理想の姿に向かうには障害がある。マンションに住む人など、関心はあるがきっかけがつかめない人などをどうするか（資料左2）。

○ 山本委員

まちづくりの支援が区役所単位までで終わっている。区役所がやっていることが地域の人に見えるように、学校単位くらいまで降りてきて欲しい（資料左4）。公立幼稚園は終わるのが早い。もう少し改革してもらえたらと思う。

○ 船戸委員

地域で孤立している学生や若者をどうするか。市は審議会をたくさんつくっているので、連携すると課題解決につながるのでは（資料左4）。

● 立木会長

コミュニティ施策に関しては、行政の中でも連携できればいいと思う。

○ 長上副会長

「ナナメの関係」と最近よく言われるが、「タテ・ヨコ・ナナメの関係があるまち」とか、「他人が好かれるまち」とか、「認知症になっても暮らせるまち」などはどう

か。それから、みんなで縁側をつくろうという意味合いのことを入れると、人が行き交う手段になる。

○ 村上委員

顔の見えるつながりは大事だと思う。東日本大震災の時に、地域と学校の間が密接なところは、避難所の自治組織がスムーズに立ち上がったという話を聞いた。避難所は学校になる場合が多いので、地域と学校の間が大事だと思う。

○ 船戸委員

地域の中で公募し、得意なことで役割ができる人を探し出すという取組が必要。

○ 中嶋委員

市に、学区単位で相談にのってもらえる担当者をつくってもらえるといいのではないと思う。必ずしもまちづくり推進課である必要はないので窓口をつくって欲しい。行政と地域が近くなる。

○ 大田垣委員

共同住宅自体が一つのコミュニティであるという位置付けをすれば、解決の糸口が出てくるのではないかな。

○ 船戸委員

私の地域のマンションは、町内全体のコミュニティに浸透してきている。マンションが独立すると町内に入りにくくなる。

○ 大田垣委員

そういう共同住宅は非常に少ない。今はアプローチの糸口すら見つからない。

○ 高橋委員

共同住宅でも終の住処として買った方、4年で出て行く学生、立地によって表情がいろいろあると思う。戸数によっても温度差がある。

● 立木会長

3ページの資料右について、今日の議論で出てきたキーワードと事務局の文章にも使えるキーワードがあるので、それも含めて事務局で整理してもらったものを次回のたたき台としたい。

5 今後の進め方について

- ・ 今年度3回目の審議会は、3月中旬までに実施することとしたい